

NEWS LETTER

No.17
2018.03

Contents

1. 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会について
2. 会員の活動報告
モザンビークよりはじめまして
3. 特集：青年海外協力隊鹿児島OBの活躍
4. 平成29年度ボランティアセミナー
5. パネル展
6. 第5回市民公開講座
7. インドネシア留学報告
8. アフリカでのJICAボランティアの活動報告
9. 平成29年度「連絡会」定期総会報告



校内5Sコンクールの写真

NEWS

会員の活動報告

・「モザンビークよりはじめまして」

在モザンビーク大使館専門調査員 鷹尾 保馬

定期総会が開催されました

平成30年1月20日（土）に、天文館ビジョンホールにて、平成29年度鹿児島JICA派遣専門家連絡会の定期総会が、開催されました。



学生の国際交流



インドネシアの研究室での様子



ベトナムのトゥガラシ農家さんとの交流

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会について

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会長
嶽崎 俊郎
Toshiro TAKEZAKI

JICA派遣専門家とは、開発途上国のニーズに応じた専門技術や知識を持つ専門家として、JICA（独立行政法人国際協力機構）の技術協力プロジェクトに派遣され、開発途上国の最前線で活躍した人たちです。相手国技術者（カウンターパート）にさまざまな技術・知識を伝えることで相手国の技術水準の向上を図り、その国の開発に貢献してきました。

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会は、鹿児島県に在住のJICA派遣専門家（OB）のネットワーク（連絡会）です。2017年12月現在、約80名の方が会員になっています。私たちJICA派遣専門家経験者は国際協力の理解者として、また、政府開発援助（ODA）の現場の体験者として、帰国後も地域におけるさまざまな活動に取り組み、国際協力・交流の促進に貢献しています。

会員活動報告

「モザンビークよりはじめまして」

在モザンビーク大使館専門調査員
鷹尾 保馬
Yasuma TAKAO

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会の皆様、はじめまして。

私は、鷹尾保馬（たかお やすま）と申します。2014年2月より、1年6ヶ月の間、JICAモザンビーク事務所で企画調整員の業務に就いていました。その後、2016年6月より、モザンビークの日本大使館で専門調査員をやっております。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、2003年から2年間、ブルキナファソで稲作分野の青年海外協力隊員を、2011年から2年間、ブラジルで食用作物・稲作栽培分野の日系社会青年ボランティアをしていました。その後、アフリカ南東部にあるモザンビークのJICA事務所で、農業・水産分野の企画調整員の業務に就きました。担当した協力案件は、稲作や南部アフリカ随一の魚市場建設、ジャトロファによるバイオ燃料の生産を通じた学術連携等です。

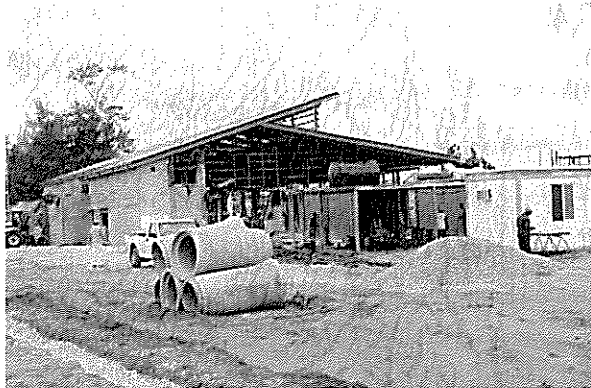
そして、現在の主な担当業務は、当地経済の状況を日本に報告したり、当地政府及び日本企業と連絡をとり橋渡し役を務めたりすることです。また、大使館が担当する草の根無償資金協力にも、少々携わっています。あと、保健・教育分野を中心に、JICA事業の大使館側の窓口的役割も務めています。

昨年8月、当地でTICAD閣僚級会合が開かれ、日本やアフリカ諸国から外務大臣級が集まり、2日間の大規模な会議が開かれました。この会議を開催するために当地の大使館員のみならず、東京の外務省やアフリカ諸国にある日本大使館から50名程度の応援出張者が当地で開催を準備するという、非常に大掛かりなものとなりました。

モザンビークは日本の約2倍の国土に人口約2300万人が住んでいます。南北に長くインド洋に面し、約3000kmの海岸線を擁しています。

因みに、対岸とのマダガスカルとの間にあるモザンビーク海峡は世界有数のマグロ漁場であり、串木野などから多くの漁船が入漁しています。

首都は国土の南端に近い、マプト市です。南緯約25度に位置し、この原稿を書いている1月現在は夏で、気温が30度を超える日はザラにあります。しかし気候は温暖で過ごしやすいところです。海に面しているため、魚も肉もあり、食生活も充実しています。隣国・南アフリカ共和国との国境まで100キロ余りと近く、マプト在住の日本



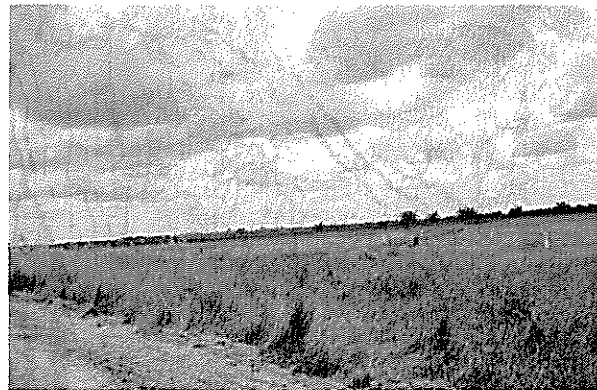
建設途中のマプト魚市場（2015年末開業）

人の週末の過ごし方の一つとして、南アのサファリヘライオンや象をはじめとした動物を見に訪れることが気軽にできます。皆様も一度、お越しになってはいかがでしょうか。

最近のモザンビーク経済は停滞気味ですが、今年は浮上する一年となりますように。

私の任期は残り半年足らずとなりましたが、悔いのないよう頑張っています。

乱筆乱文にて失礼しましたが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



モザンビークの水田地帯

特集

青年海外協力隊鹿児島県OBの活躍

青年海外協力隊鹿児島県OB会のご紹介

当会は1974年に発足し、現在500名余の協力隊、シニアボランティア、日系社会青年／シニアボランティアのJICAボランティア経験者により構成されています。発足以来、鹿児島県内の各種イベントで一般の方に海外ボランティアの広報および参加の啓発活動を行っています。帰国したボランティアの社会還元の一助として“留学生と協力隊OBが先生事業”を行い、県下の学校に毎年40名以上の会員を国際理解・協力の講師として

青年海外協力隊鹿児島OB会
桑山 昌洋
Masahiro KUWAYAMA

派遣しています。この活動には専門家連絡会の方にも講師としてご協力いただいております。また、“鹿児島県青少年国際協力体験事業”では、県下の中高生16名程度を毎年アジアの国々に派遣し、現地で協力隊員の活動視察や一般家庭でのホームステイを通して、若い世代の国際化にも貢献しています。また、専門家連絡会と協力して、県内各地でJICAパネル展を行い、広報活動を行っています。

「協力隊の経験を生かす」

平成19年度4次隊 ポリビア 栄養士
渡辺 里美
Satomi WATANABE

私の初めての海外は、任国ポリビアです。今は「第2の故郷」と呼べるくらい大切な場所です。配属先は、富士山より高い標高約3800mに位置する2次病院で、受診者は農民や先住民の方が多い場所でした。要請内容は、母子医療サービスが無料になったにも関わらず、妊娠や出産時に医療機関を受診しないケースが多い。それが、妊娠・出産時の死亡率を高める要因の一つとされ、次の3点が主な活動内容でした。①病院スタッフの栄養に関する知識向上のための栄養指導講習会 ②病院に来る妊産婦や乳幼児の母親を対象とした母親学級の開催 ③近郊のコミュニティーを巡回訪問し栄養改善・衛生教育の啓発活動支援。

活動を始めるにあたり、先輩隊員からいただいた「赴任する前に活動する上で考えて欲しいことリスト」を何度も読み、それらを実行しました。そのリストを一部紹介します。①ルールは自分で敷くこと。 ②無い無い尽くしをばやかない。 ③最初の数ヶ月は周りの様子を見る。人間関係の構築。相手の中へ入り込む努力。 ④日本のモノサシはポケットへ。 ⑤不言実行より有言実行。有言不実行は最悪。語学学習と報告書提出によって活動の意義付け等々。

そこで最初の活動として、病院の厨房職員から現地の食材や調理法などを学び、朝の回診に参加することで医師や看護師から病院食の説明などを聞き、周辺住民とは挨拶や地元特産の食材を使ったお菓子を一緒に試食や調理するなど交流を図り、病院職員や周辺住民と人間関係の構築に努めました。さらに、配属先へ活動内容などをまとめた報告書を毎月提出しました。

それが功を奏したのか、徐々に要請時の活動内容に移行する機会が巡ってきました。残念ながら、要請の活動①の「病院スタッフに栄養指導講習会」は開催できませんでしたが、調理職員からの提案で、病院食の週間献立表と食種別の使用できる食材一覧表を作成し、調理職員の業務効率を図りま

した。また、帰国前に職員へお礼も兼ねて調理職員と一緒に日本食を作り、職員食として提供。野菜料理も取り入れ、バランスの良い食事を少しはアピールできたと思います。

次に活動②は、小児科の診察室で看護学生と診察前の問診や栄養・衛生指導を実施。小児科と産婦人科の待合室で、長い待ち時間を利用して、ミニ教室を開催（栄養と衛生）。その後、政府の方針で医療保険に入っていない妊婦および授乳中の女性を対象とした条件付現金給付のプログラムが開始されてからは、受診する女性が増加。それに合わせて、病院の会議室で定期的に栄養や衛生のミニ講習会を病院職員と行いました。

活動③は、2つのNGO団体と病院職員、協力隊仲間など、数多くの方々に協力して頂いたことで充実した活動ができました。カウンターパートに活動中のNGO団体を紹介され、一緒に近郊コミュニティーの母親グループ（5歳未満の子供を持つ）へ栄養と衛生教育・調理実習を実施しましたが、しばらくしてその団体が撤退。その後、母親グループを引き継ぎ、病院職員と共に活動を続けていきましたが、NGO団体から支給されていた食料配布がなくなったことで、参加者が激減。残念ながら、ほとんどのグループは解散。病院職員も参加できなくなり、途中から協力隊仲間と一緒に帰国直前まで残ったグループと活動を続けました。もう一つNGO団体からは、大家を通じ



院内のミニ講習会

鹿児島大学でのパネル展

(鹿児島県JICA派遣専門家連絡会・JICAデスク鹿児島 共催)

平成29年12月に鹿児島大学のキャンパス内でパネル展を実施しました。12月5日から12月14日までは郡元キャンパスの学習交流プラザ中2階の学習ラウンジ、12月14日から12月22日までは桜ヶ丘キャンパスの桜ヶ丘会館1階で、約20枚のパネルを展示しました。郡元キャンパスでは保健医療を除く幅広い分野、桜ヶ丘キャンパスでは保健医療分野のパネルを用いました。

両スペースとも学生らが食事や自主学習に集まるスペースに隣接していることより、興味のある学生がパネルをのぞき込んでいる姿が見られました。

今後もパネル展を継続し、身近なところに国際協力に携わった人がいることを知ってもらい、国際協力への理解を深めてもらいたいと思っています。

(鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会長 嶽崎俊郎)



第5回市民公開講座

オリザと過ごした27年ーアフリカの農業を考えるー

坂上 潤一

Jun-ichi SAKAGAMI

アフリカは日本から遠く離れていますが、意外と日本とのつながりは強いのです。私は、1991年に初めてアフリカの地を踏みました。今でも、飛行機が空港に降り立った時のことを鮮明に覚えています。飛行機のタイヤは、灼熱の太陽の光を受けた滑走路に接すると、キュルキュルと大きな音を立て軋み、まるでアフリカの大地が吠えているようにも聞こえました。26歳の時でした。それから27年間、私はアフリカ農業、特に稲作開発にどっぷりとつかることになったのです。最初の赴任地は、当時世界の最貧国であったニジェール共和国。とにかく熱い。どこに行っても、いつも熱い。夜は水を浸したタオルを体に巻きつけ就寝するが、30分で自然乾燥。夜中も35度を下らず、耐え忍びました。職場は、国立農業研究所のイネ育種研究室。朝の7時から昼の2時までが仕事時間。午後は暑過ぎて仕事にならないことがその理由らしい。滞在中にサハラ砂漠を訪れました。180度の満天の夜空に無数の数えきれない星が、“生きていてよかった”、と世界を創造した神様に感謝しました。しかし、いい事ばかりではありませんでした。マラリヤ、住血吸虫に交通事故な

ど、生死をさまよう不運を体験しました。一方で、アフリカ固有のアフリカイネと



呼ばれる栽培イネ種の*Oryza glaberrima* Steud.との出会いが、その後の私の研究生活に大きく影響したのです。“オリザ (*Oryza*)”とは、前述の通り、イネの属名を表したもので、ラテン語で“イネ”を指示しています。このアフリカイネは、私たちがよく知るアジア固有のアジアイネよりも収量はだいぶ低いですが、不良環境にめっぽう強いのです。洪水になっても、土が乾燥してもよく生き延びました。このイネは地域で3500年以上も栽培し続けられており、コメの安定生産を実現しています。玄米は有色で、赤や黒色が多く、抗酸化物質が含まれ、機能性も十分であると考えられています。このように、アフリカイネはアフリカの不良環境の克服や遺伝資源の利用の点においても、極めて貴重だと思っています。このような地域資源をうまく活用して、農業開発の助けにできればうれしい限りです。その後、ギニア、ガーナそしてウガンダと、場所を変えながら“オリザとともに”、私の研究生活が続いて行きました。

さて、我が国がアフリカに対して行ってきた稲作の国際協力の変遷について紹介します。1970年代、アフリカ地域の主に大規模灌漑稲作が可能なモデル地区において、JICAを基軸として技術開発とその普及に係る協力が本格的に開始されます。具体的には、無償・有償資金協力によって、灌漑水田の整備や技術研修センターを設置し、専門家チームを派遣して技術移転が行われました。その結果、タンザニアのローアモシ地区やケニアのムエア地区などのモデル地域において、劇的に収量向上が成し遂げられます。ここでは、アジア型の栽培管理方法の一つである移植技術を導入し

市民公開講座

オリザと過ごした 27年
ーアフリカの農業を考えるー

【日 時】 2018年1月20日(土) 16:00~17:00 (15:00 受付開始)
 【会 場】 天文館ビジョンホール4階 (鹿児島県東千石町13番3号 天文館電停前)
 【問合せ】 鹿児島大学国際国際開発推進課 事務局 (tel:090) TEL 099-276-6803, jica@i3.kufm.kagoshima-u.ac.jp
 【主 催】 鹿児島県 JICA 経済専門派遣協会
 【後 援】 JICA九州 鹿児島大学 鹿児島県 鹿児島市

■講演内容■
 アフリカは日本から遠く離れていますが、意外と日本とのつながりは強いのです。私は、1991年に初めてアフリカの地を踏みました。今でも、飛行機が空港に降り立った時のことを鮮明に覚えています。飛行機のタイヤは、灼熱の太陽の光を受けた滑走路に接すると、キュルキュルと大きな音を立て軋み、まるでアフリカの大地が吠えているようにも聞こえました。26歳の時でした。それから27年間、私はアフリカ農業、特に稲作開発にどっぷりとつかることになったのです。最初の赴任地は、当時世界の最貧国であったニジェール共和国。とにかく熱い。どこに行っても、いつも熱い。夜は水を浸したタオルを体に巻きつけ就寝するが、30分で自然乾燥。夜中も35度を下らず、耐え忍びました。職場は、国立農業研究所のイネ育種研究室。朝の7時から昼の2時までが仕事時間。午後は暑過ぎて仕事にならないことがその理由らしい。滞在中にサハラ砂漠を訪れました。180度の満天の夜空に無数の数えきれない星が、“生きていてよかった”、と世界を創造した神様に感謝しました。しかし、いい事ばかりではありませんでした。マラリヤ、住血吸虫に交通事故な

■質疑応答■
 坂上 潤一氏
 1962年大阪府生まれ。千葉大学内科学部卒業。東京大学大学院修士課程修了。東京大学農学部助教授、農学博士。海外に稲作技術の普及、農産物加工技術の普及、食料安全保障の推進を目的に同僚と共同で、3ヶ国(アフリカ)で稲作技術の普及を推進。現日本稲作学会海外交流推進委員長、評議員、アジア稲作学会 Executive Secretary などを歴任。お問い合わせのうえ、ぜひ会場へお越しください!

て他の母親グループへ栄養と衛生教育の依頼を受ける機会を頂きました。そして、病院職員や学生達とは、定期的に近郊コミュニティーへ巡回訪問を行い、職員達は予防接種を実施。私は主に身体測定と記録、栄養補助食品配布や食生活の聞き取りとアドバイスを行いました。その他、地域の健康祭りに試食会も兼ねた栄養と衛生のブース出展を毎年行い、協力隊仲間とは幼稚園や小学校へ栄養と衛生教育の巡回（人形劇など行った）をしました。

活動とは別に、食べ歩きや地元のお祭りなどに参加して何度も踊りました！現在は、赴任先の同僚や大家・友人たちとSNSと通じて交流を続けており、帰国後何度かかつての任地にも赴き、その後についても知ることができました。

一方、帰国後の仕事は、離島の病院の管理栄養士です。主な仕事は、栄養部門の統括（給食管理、栄養管理、衛生管理など）、多職種からなる各委員会の参加で入院患者様をサポート（栄養サポートチーム、院内感染対策、褥瘡対策、リスクマネジメント、システムなど）、実習生の受け入れ、栄養指導などです。様々な患者様と関わるので、毎年研修会へ参加や資格取得（主に栄養に関わる）を目指し自己研鑽に努めています。下記は入職後、取得した資格の一部です。▽静脈経腸栄養管理栄養士 ▽鹿児島県地域糖尿病療養指導士 ▽栄養サポートチーム専門療法士 ▽JDA-DAT（日本栄養士会災害支援チーム）登録予定 ▽大学3年次編入と卒業（医療福祉や国際協力、語学など様々な分野を学びました）

入職当初は、栄養指導が主な業務であり、特に糖尿病や慢性腎臓病（以下CKD）の患者様と関

わる機会が多かった為「患者様が重症化してから来院している」ことが気になりました。「重症化する前にどうにか来院できないのか？積極的に栄養士と気軽に話をしたいと言って頂けないだろうか？」と悩んだ時期もありました。そんな中、去年、県内で地域糖尿病療養指導士の資格が新たに発足され、無事取得でき、地元の糖尿病自主活動グループと関わることができました。その事務所が市保健センターにあったことで、市主催の健康まつりのブース出展（糖尿病）する機会とCKD予防講座の講師依頼（栄養に関する）、県総合防災訓練が地元で開催された時は、栄養部門で一緒に参加しないかとお声をかけて頂くことができました。

最近は、「食形態」と「食事情報提供書」にも取り組んでいます。ここ数年で「食形態」のガイドラインが発足され、全国的に食形態の統一と情報共有の重要性が増し、それに伴う活動が活発に行われています。しかし、当地域では施設単位で行っているだけでした。そこで、保健所に事務所を置く地区の給食施設連絡協議会（地区にある病院・社会福祉施設などが参加）の自主研修会で、去年から「食形態統一」をテーマに研修会を企画運営しています。年一回の研修会ですが、ガイドラインを学び、各施設で提供している食形態をガイドラインに併せて分類を行い一覧表を作成。同じ食事名称でも、ガイドラインでは異なる分類になることや、危険な食形態を学びました。この協議会のメリットは、施設の事務長クラスと給食に従事する職員が参加でき、各施設側の協力が得やすく研修会の参加率も高い、食形態統一には最適な環境作りが可能という点です。



地域の健康まつり



母親グループへ衛生教育

また、患者様は島内の病院や福祉施設を歩き来ることが多いため、どこに行ってもスムーズな食事提供をができるように「食事情報提供書」を作成して、退院先と情報共有ができるように取り組みを始め、島内で自主活動している栄養士会で「食事情報提供書」の研修会をする予定です。今後も地域の関係機関と連携して継続的な活動を行っていきたいと思います。

このように、協力隊の活動と現在の仕事を振り返ると、協力隊で得た経験（色んな職種の隊員仲間や任地での出会い、色んな機関と活動を共にし

たこと、何度も予測不可能なことを経験して臨機応変な対応をすることで積極性を身につけ、自己選択の幅を広げることができた）が現在の職場だけでなく、積極的に自分から周辺の関係機関へ活動の幅を広げるきっかけ作りの原点だと思います。

また、いつの日かポリビア、もしくは世界のどこかで栄養に携わることが私の夢です。

最後に、協力隊事業に参加できたことは、大変貴重なことであり、支援していただいた皆様にご場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

「雑談・雑学から改善の継続（習慣）へ」

平成21年度4次隊 グアテマラ 品質管理
豎山 孝男
Takao KATAYAMA

「盆栽への水のやり方を教えてくださいませんか」と面会者が現れたのは、職業訓練校から提供された私の事務室でした。「自分は知らないがインターネットで探して見ましょう」と答え、動画を見せながら、「少ないのは構わないが、多過ぎるのは禁物である」旨を伝えた所、納得した様子で帰って行った。

5S活動を実践・指導すべく派遣された商社でも、「桜の花ってどんな様子なの？」と出勤途中の社員から話し掛けられ、「一日待って頂けますか」と頼み、その夜、自宅のYouTubeで検索すると桜の動画が沢山見つかり、沖縄から弘前までの満開の様子に加え、お城や神社、日本庭園までもが含まれ、いずれも外国人ならではの視点で公開されているのを幸いに、動画十種にURLメモを添えてCD化し、翌日進呈した結果、問い合わせは無くなった。

当初は「5S（整理・整頓・清掃・清潔・躰

の普及を図って外貨を稼ごう」という設定だったので、6ヶ月もしない内に「日本文化」という要素を活動に加味すべきではないかと考える様になりました。例えば、整理状態を判定する際、引出しや棚の中に不要物（普段使用しない物）が皆無であれば○で2点、大量に在れば×で0点、少し（まあまあ）であれば△1点という三段階で評価して遠慮なく互いに報告・連絡し合う、これなら誰にでも評価出来る。これは、ウナギ屋のメニューには「松・竹・梅」の三段階が有って、選び易くしてあるのだと何かで読んだのを利用して。又、日本人は他人やご近所さんが気になる、という心理学も使って、自分の部屋の5S活動を他の職場の人に評価させる、という競争原理を提案、了承の上、5Sコンクールの開催にまで至ったケースも有りました。この事は私が居なくなっても改善活動が習慣となって継続されるであろうとの期待を抱かせてくれました。

「20年越しの青年海外協力隊」

平成22年度 | 次隊 ザンビア エイズ対策

小山 裕子

Yuko KOYAMA

「いつかアフリカでボランティア活動を。」

そう願った高校2年の春。養護教諭の経験を今なら生かせるかもしれない。平成22年、現職教員特別参加制度を利用し、出発した。

HIVは、予防可能な感染症である。しかし、なぜ、新規感染者が増加し続けるのか。

国際協力とは、物資支援のみならず、自立するための技術や技能を与えることであり、そこには教育がどうしても必要だと思っていた。

派遣先は、保健省管轄の南部州主要のセポセンター。目標は、サポートグループの巡回訪問の技術向上とIGA（現金収入活動）、リーダー育成であった。

野菜隊員と協働し、自転車で村を巡り、作物作りと栄養指導・保健指導をした。

現地では、先進国の寄付による治療薬の無料化で、寿命が伸び、在宅ケアが中心となっていた。研修を受けたリーダーが、カウンセリングやDOTS（結核服薬指導）、ヘルスチェックをする。ここでは、支援者自らが同じHIV感染者であり、それがゆえに相手の心を動かす祈りや対話があることを知った。

初訪問は、17歳の少年の病死。そして、住む場所を追われた村の人々の苦悩。その中にありながらも荒地を耕し、懸命に助け合い、生きる姿があった。

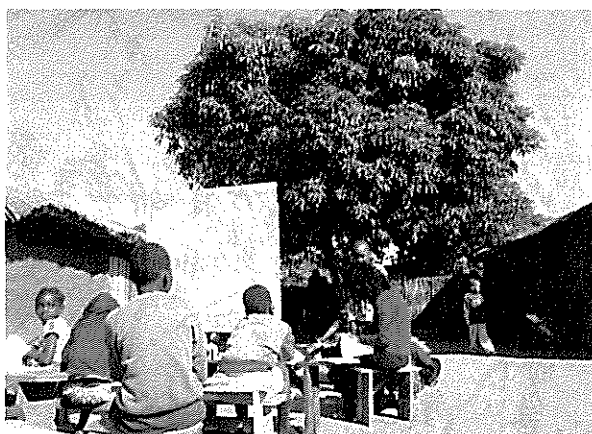
2年目は、ただ、寄付を待つだけでなく、現地の人々が自活できるよう洋裁クラブを設立した。職場の裏庭に放置されたミシンを有志で修理し、洋裁が得意な者と共にザンビア布やモリンガを用いた土産品の開発に取り組んだ。3ヶ月経つ頃には、公務員月収以上の売り上げを伸ばした。

帰国後は、教育現場や地域で年間数回の講演会や授業を通して協力隊経験を伝えてきた。

今後は、「僕もいつか、協力隊に参加して世界のために役立ちたい。」と語ってくれた教え子たちに、国際協力のバトンを渡したい。



ボランティアグループリーダーのクリスティーンさんと筆者



コミュニティスクールの青空教室



在宅ケアの巡回訪問

平成29年度ボランティアセミナー

平成29年度青年海外協力隊 体験談 & 写真展 in 鹿児島大学
 (鹿児島県JICA派遣専門家連絡会・JICAデスク鹿児島 共催)

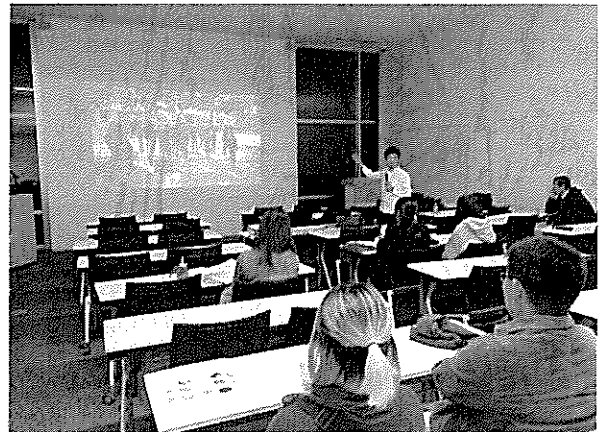
平成29年11月24日(金)、鹿児島大学郡元キャンパス学習交流プラザにおいて、JICAボランティアセミナーを実施いたしました。学生ならびに関係者をあわせて11名が参加し、JICAボランティア概要の説明および青年海外協力隊の活動紹介を行いました。

今年度は、鹿児島大学教育学部卒業生の仮屋慶一氏に、青年海外協力隊員としてモルディブ共和国での体育指導の活動経験をお話しいただき、在学中に取り組んだ活動から帰国後のご自身の進路までを含めてお伝えいただきました。赴任地の教員や生徒とのコミュニケーションの取り方、活動中の困難との向き合い方、ご自身が帰国してからの現地教員の指導方法を考慮した目標作成などにも焦点を当ててお話しいただき、在学生在が社会に出てから役立つヒントもお送りいただきました。

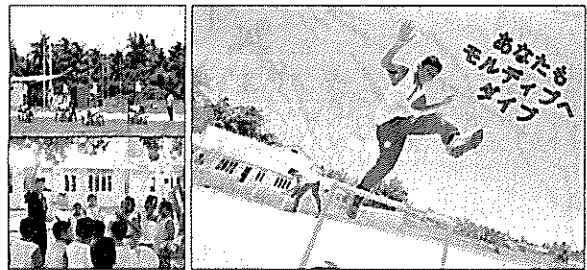
セミナーの参加者からはJICAボランティア事業の体制やその他教育分野での活動についての質問があがり、参加者ともじっくりと向き合うことが出来ました。また、セミナー後、2週間にわたり学習交流プラザと桜ヶ丘キャンパス桜ヶ丘会館(生協)にて国際協力写真展も実施し、県出身者による国際協力の活動紹介をいたしました。

1965年の青年海外協力隊発足以来、鹿児島県から900名を超える方々がJICAボランティアへ参加しておりますが、このような場が国内外での国際協力について考える機会となることを期待します。

(JICAデスク鹿児島 国際協力推進員 福永みゆき)



JICA ボランティアセミナー 青年海外協力隊 体験談 & 写真展 in 鹿児島大学 ~ あなたも モルディブへ タイフ ~



【体験談】仮屋 慶一 さん(モルディブ/体育)

鹿児島大学教育学部卒業後、モルディブで青年海外協力隊として活動しました。私の活動内容は、小・中学校に所属し、体育の授業や部活動の指導、教師の技術向上への助成などでしたが…「はモルディブ…! 青年海外協力隊に参加するメリットや帰国後の進路についてまでお話しできればと思います!

【日時】 11月24日(金) 17:30~19:00
 【会場】 鹿児島大学郡元キャンパス 学習交流プラザ2階
 鹿児島市郡元1丁目 21-24
 郡元キャンパス学習交流プラザ2階 学習フロンティア
 桜ヶ丘キャンパス 桜ヶ丘会館(生協)
 【写真展】 12月5日(金)午後~12月14日(木)
 12月15日(金)午後~12月21日(木)

※ 全学年対象・事前申込不要・参加無料・入場自由
 ※ 主催・ボランティア概要説明
 ※ 18:00~18:30 青年海外協力隊体験談
 ※ 18:40~18:50 応募方法/質疑応答/アンケート
 ※ 19:00 終了

＜お問い合わせ＞ JICAデスク鹿児島 福永
 E-mail: jicadesk@kagoshimabunkyo.ac.jp TEL: 099-271-6000 FAX: 099-271-6203
 広報課、その他の活動内容など、何ともしお電話にお問合せください!! (今年度の募集は終了しました)

て、高投入型施肥体系を構築しました。さらに、農業機械の導入による作業効率の向上などの技術体系化は、周辺地域へのインパクトも大きく、技術移転が拡大していきます。1980年代の後半になると、各地の大規模灌漑施設の老朽化が進むとともに、構造調整政策のもと、施設管理に携わる政府職員の数は大幅に削減され、農業研究の対象は、小・中規模農家へとシフトします。その結果、1990年代後半以降、援助の潮流は貧困削減、食料の安全保障に大きく変革し、貧しい小規模農家が自分たちで計画から施工、管理までできる、小規模な灌漑稲作への協力が一般的となってきました。2000年代に入ると前述のアジアイネとアフ

リカイネの種間交雑種の育成に成功し、我が国も積極的に各地で稲作振興を進め、それら品種の普及が現在までに進んでいます。2009年以降現在まで、東アフリカのウガンダでは、国立作物資源研究所において、稲作振興プロジェクトが進められています。ここでは、コメ生産拡大と適性技術移転を目的に、幅に広い分野で研修及び研究が進められ、講演者はこのプロジェクトに、JICA派遣専門家として協力しています。このように、我が国の得意とする農業分野の稲作技術の蓄積が、アフリカの農業開発に大いに役立っていることは誇らしいと思います。

インドネシア留学報告

「インドネシアの留学で思ったこと」

私は2016年9月から2017年5月までの9か月間、インドネシアのスマトラ島パレンバン郊外にあるスリウィジャヤ大学に留学しました。インドネシアをはじめ、東南アジアの多くの地域で雨季乾季の季節が存在します。雨季にはスコールのような雨が降り、作物が水に浸かってしまうなどの被害を受けます。そのような背景から、インドネシアの農業の実態、特にトウガラシ栽培を実際に見に行くことと、現地環境下でのトウガラシ栽培実験を行うことを目標にこの留学を行いました。

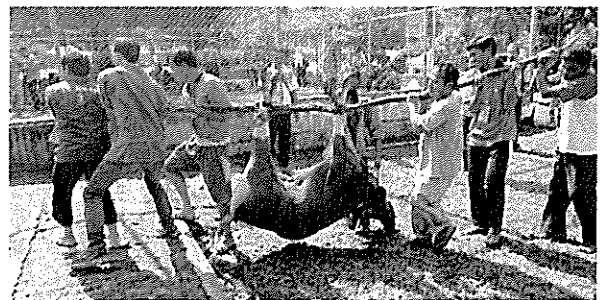
インドネシアに到着し、まず初めにぶつかったのが言葉の壁でした。実際に海外に一人出してみると、インドネシアという文化も生活環境も違う国ということや、英語の自信のなさ、日本人が一人という様々なプレッシャーが生まれ、早速ホームシックになってしまいました。そんな中でいろいろと話を聞いてくれたのがインドネシア人の友達でした。インドネシア人はとても人懐っこく、様々なイベントに誘ってくれたり、話を聞いてくれたりして、だんだんとインドネシアの環境に慣れて

鹿兒島大学大学院農学研究科2年
東 愛理
Airi HIGASHI

いくことができました。

インドネシアで過ごしていて一番印象に残っていることは宗教についてです。インドネシアは世界最大のイスラム教国家であり、独特の習慣がたくさんあります。また、スマトラ島はイスラム教徒だけでなく、キリスト教徒もたくさんいます。

日本とは大きく異なる宗教の存在にはじめは戸惑いましたが、宗教が人々にとってどのような存在であるのかいろんな人々に話を聞くうちに分かってきました。インドネシアではキリスト教徒を含め、人々のつながりを保つ重要なツールであるということもわかりました。このような日本では学ぶことのできない感覚を実際に知ることがで



イスラム教の重要なイベントである犠牲祭の様子

きたのはインドネシアに留学して得ることができたものの一つです。

留学の大きな目的である実験は問題が山積みでした。まず実感に使用する水を自由に使うことができないというのが大きなショックでした。イン



激しい降雨により、湛水状態になってしまったトゥガラシ畑

ドネシアでは断水が頻繁に発生します。そこで雨水を利用するなどし、水を確保しました。

分析においても日本ならあって当たり前の分析器具が無かったり、学校は16時には閉まってしまふなど日本では起こりえない状況に置かれることが多くありました。その都度自分で工夫し、対処していくのがとても大変ではありましたが、自分の成長に大きく影響したと考えています。

インドネシア留学はつらかったことが大半を占めますが、留学したことに不思議と後悔はありません。それは辛かったことも含め自分のためになっていると理解できているからだと思います。この経験をこれからの生活にも生かしていきたいと考えています。またこの留学を支えてくださったすべての人に感謝を申し上げます。

ベトナムのトゥガラシを追い求めて

鹿児島大学大学院 農学研究科2年
小森 健太
Kenta KOMORI

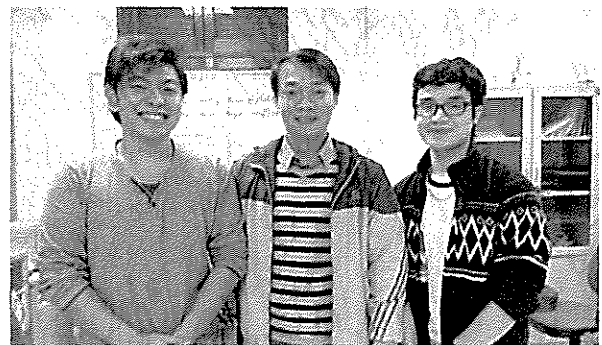
私は2016年12月～3月10日までの約3ヶ月間、ベトナムのハノイにあるベトナム国立農業大学に留学した。

現在、日本でのトゥガラシの生産量は増加し、消費量も増えているが、9割が中国からの輸入品であり、味のバリエーションが少なく、安全面の懸念がある。そこで、トゥガラシの生産量は多い東南アジアから多様なトゥガラシの遺伝資源を探索・収集し、日本への導入を考えた。中でもトゥガラシの調査の前例の少ないベトナムにターゲットを絞った。

ベトナムでの留学が始まりいきなり大きな壁に当たった。それは調査に関しての農家の有無であった。ベトナムのトゥガラシの調査をする際、まずはトゥガラシを栽培している農家の発見からであったが、稲作がメインの農家が多く、留学先の大学でもトゥガラシの研究をしておらず、情報が皆無なところからのスタートであった。しかし、諦めずに友人づくりから始め、先生や各学生の地元情報を元に農家を紹介して頂き、全部で9か所のベトナム地域にいる23の農家を訪問し、26系統のトゥガラシを収集することが出来た。

調査の際にも問題が多々あった。それは言葉の壁だ。しかし、農家に訪問した際には通訳を兼ねたベトナムの学生を交えることで関係や調査も円滑になった。また共にお酒を酌み交わすことで言葉の壁を越えてより親密になり、農家ならではの悩みや日本との文化的背景の違いなどを知る良い機会にもなった。

今回の留学を通して、人と人の繋がりの大切さ、人の温もりを改めて感じただけでなく、問題に対しても諦めずに方法を変えて取り組むことで目的を達成することを学んだ。研究目的の達成だけでなく、人としてより成長できた良い留学であったと思う。



左から、筆者、チュン先生、ミン君

平成29年度「連絡会」定期総会報告

平成29年度「鹿児島県JICA派遣専門家連絡会」

日 時：平成30年1月20日（土）

13：30～15：00

場 所：天文館ビジョンホール4階

出席者：嶽崎俊郎（会長）、稲見廣政（幹事）、坂上潤一（幹事）、山岡耕作（幹事）、馴田義美、野呂忠秀、北野日士、汐月卓也、佐藤道郎、富岡譲二、市川敏弘（事務局）、水上惟文（事務局）、北香理（事務局）、福永みゆき（特別会員）

来 賓：古田宣稔（青年海外協力隊鹿児島県OB会会長）、桑山昌洋（同顧問）

挨拶

1. 嶽崎俊郎会長
2. JICA九州センター 植村吏香所長
3. 青年海外協力隊鹿児島県OB会 古田宣稔

議 題

1. 役員改選
平成30年度、31年度の2年間（任期2年）、現行の役員体制で運営したいとの提案が嶽崎会長よりなされ承認された。
2. 平成29年度活動報告
欠席の越塩幹事に代わって嶽崎会長より以下の報告が行われた。

- 1) JICA九州の支援を受け、JICAボランティアセミナー（11月29日鹿児島大学学習交流プラザにて青年海外協力隊説明会）の開催
- 2) 市民対象パネル展「国際協力パネル展～鹿児島と世界をつなぐ人々」を2月末にイオンモール鹿児島3階にて開催予定
- 3) 2)と同様の学生対象パネル展を平成29年12月に、鹿児島大学郡元キャンパスと桜ヶ丘キャンパスにて開催
- 4) 国際理解教育に関する授業として、鹿児島大学で授業科目「国際協力論」を5コマ担当（全15コマ）、受講生数約100名
- 5) 会報誌NEWSLETTER 17号の発行、発行部数200、平成30年2月発行予定
- 6) 総会の開催（平成30年1月20日）於天文館ビジョンホール4階
- 7) 第5回市民公開講座の開催「オリザと過ごした27年：アフリカの農業を考える」、講演者：鹿児島大学農学部教授坂上潤一氏。総会終了後午後3時半より午後5時まで。
- 8) ホームページの開設準備中（もう一息の段階）

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成15年2月28日)

1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、もてる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結集する。

2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

- (1)政府開発援助（ODA）進展動向に関する調査研究及び提言
- (2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3)鹿児島県と海外諸国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- (4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

4. 会長及び幹事

- (1)会の運営を円滑に行うため、当会に会長1名および世話役として幹事4名を置く。
- (2)会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3)幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当る。
- (4)会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5)本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6)本会に臨時会計役を定め、所定の会計処理を行う。

5. その他

この申し合わせ事項を改変、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

編集後記

今号は、青年海外協力隊のOBの活躍を特集しました。海外での経験、それも協力隊としての貴重な時間が、その後の人生に大きく影響していることが分かりました。本当に素晴らしいと思います。本ニュースレターは、会員のみならず、一般の方々にもぜひ触れていただきたいと願っています。皆さまからの、ご意見をお待ち申し上げます。

編集人：坂上 潤一

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報 第17号

発行 2018年3月

発行者 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会長 嶽崎 俊郎

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会事務局

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

鹿児島大学医歯学総合研究科国際離島医療学内

電話：099-275-6853 FAX：099-275-6854

E-mail：takezaki@m.kufm.kagoshima-u.ac.jp

担当：嶽崎俊郎（たけざきとしろう）